

か と せんこう か やりぶた 蚊取り線香と蚊遣豚

夏、みなさんのおうちでは、蚊にさされないよう、どんな道具で予防していますか？

かつて蚊取り線香とその入れ物（蚊遣豚など）は、どこの家庭でも見られたもので、寝床に吊るす蚊帳とともに、夏を過ごすのになくなくてはならない道具でした。

しかし今、ホームセンターに行くと、蚊取り線香も売られてはいますが、電動の蚊取り器、肌に吹きつける虫除けスプレー、窓際やベランダにぶら下げるだけの虫除けプレートなどなど、実にさまざまな製品があふれています。また最近「無臭」をうたうものが多くなり、虫除け効果と同時に、人間にとっての快適さも求められているようです。

少し前までは、電源のないアウトドア活動や農作業などでは、蚊取り線香もまだまだ重宝されていたものの、電池式の携帯蚊取り器が登場した今では、蚊取り線香の出る幕はすっかり少なくなってしまいました。そしてそもそも線香に限らず、マッチで火をつけること自体、もはやわたしたちの日常のありふれた行為ではなくなりつつあります。

こうして、今や「むかしの懐かしい道具」の仲間入りをしつつあるともいえる蚊取り線香と蚊遣豚ですが、それぞれ人間の知恵と工夫によってできた道具です。その点を詳しく見直してみましょう。

か と せんこう 蚊取り線香

殺虫成分を含む除虫菊を原料につくられた線香。

明治時代、和歌山で蜜柑栽培を営んでいた上山英一郎は、アメリカでの先例を参考に、殺虫効果のある除虫菊を量産栽培していましたが、殺虫効果を高めるために粉末にしたものを線香に練り込むことを考案し、1890 明治 23 年、世界初の棒状蚊取り線香を発明しました。しかし 40 分程度しか持続しなかったため、より長い時間燃焼させるための試行錯誤を続けた結果、1902 明治 35 年、今の渦巻き型が発売されるに至りました。そして 1910 明治 43 年、「金鳥」の名で商標登録されました。

蚊取り線香の長所は、蚊に抵抗力がつきにくく、一定の有効成分を放出し続けることで、日本の伝統的な家屋形態に適しているといえます。最近ではアジアやアフリカなど、まだ電気が十分に届かず、蚊が多く発生し、刺されると病気を招きかねない気候の地域において、殺虫成分を練りこんだ蚊帳とともに、日本のすぐれた商品として人気が増しているそうです。



岡崎むかし館 蔵

か やりぶた 蚊遣豚

蚊取り線香がなかった時代、おがくず、小枝、落ち葉、乾燥させた草などを使って火をおこし、いぶすことで蚊を追い払っていました。これを蚊遣といいますが、江戸時代後期、都市部では、蚊遣のための蚊遣木（菅を束ねたもの）が売られていたそうです。

蚊遣豚とは、この蚊遣を焚くのに持ち用いる豚の形をした陶器のことで、江戸時代後期の絵や川柳にも登場します。大きく開いた後部から蚊遣木を入れて焚くと、前面の鼻や口から煙が出るようになっていて、見た目の面白さから、夏の風物詩としてのイメージが定着しています。



岡崎むかし館 蔵